

令和7年度 独立行政法人日本スポーツ振興センター新博物館展示・運営に関する有識者懇談会  
(第8回) 議事要旨

1. 日時 令和8年3月5日(木) 13:00~15:00

2. 場所 独立行政法人日本スポーツ振興センター 外苑事務所

3. 出席者

・委員(計10名)

大林太朗委員、笠原健司委員、君原嘉朗委員、沓沢博行委員、栗原祐司委員、田良島哲委員、萩原恒昭委員、山神孝志委員

(オンライン) 荒木絵里香委員、建石徹委員

・事務局

大西理事兼館長、末木推進役、新名主幹、三澤主幹、木村専門職、壬生施設部企画調整役

4. 議事内容

議題(1) 展示実施設計業務の概要報告

丹青社より資料2について説明があった。委員からの主な意見は以下のとおり。

- ラグビー競技経験者には重傷障害を負われている方々も多い。現在のラグビー場は建物も古く、観戦しやすい環境とは言い難い。新ラグビー場にはそうした方々をサポートできるような配慮がされている。博物館においてもそうした方々が来館しやすく、見やすい配慮をお願いしたい。
- スポーツシーンリレーは大変興味深い企画である。大学や体育学の世界において戦後の著名な体育学者の1人である金原勇(きんばらいさむ)は、戦前はアスリート、戦後は学者として、生活の体育化や体育の生活化等シームレスな考え方を提唱している。考え方の概念として踏まえると、研究者から見た時により厚みが出てくるのではないか。秩父宮が所有している資料と整合性を取りながらできると面白いと思った。
- ニューススコープに『アサヒ・スポーツ』を使用するとあったが、他にも活用できる資料があるのではないか。1932年のロサンゼルス五輪の写真帳等、日本にはほとんどない資料がある。常設展か企画展にもよるかもしれないが、このような貴重資料をここに織り交ぜていけるとより良くなり、マニアックな方々にも響くのではないか。
- 什器の展示ケースについて、壁面はエアタイトケースということだが、他にもエアタイトケースは想定しているのか。今後、スポーツ関連資料がそう遠くない未来に重要文化財に指定される事例も出てくると予想している。そうなると展示室へもかなり厳しい条件が文化庁から課せられるため、必要な準備をしておくのが将来的にもよいのではないか。
- 資料の閲覧について、コレクションスコープで見られるとよいのではないか。今後追加できるか分からないが、近くへ行くと目の前にある資料を持込の端末でも見られるという機能がつくと、来場者にとってより便利ではないか。
- 無料エリアと有料エリアを分けて半々位のスペースになっているが、たくさんの子供たちに見てもら

いたい時に有料エリアであっても無料でできるようなフレキシブルな運用ができるとよいのではないか。

- 設置されるエレベーターについて、階段を利用される方々は壁面を見ながら下りると思うが、エレベーターを利用する車いすの方々も同じような楽しみが得られるとよい。
- ニュースcopeが1社の記事だけなのは疑問である。権利問題もあると思うが、写真や記事だけなのか、動画があるのかも留意点である。昔の記事は今では表現できないものもあるが、あえて注釈を入れて歴史として見せるのはどうか。過去には障がい者に対して極めて驚くような報道をしていて、それを当時は当たり前のように報道していたという事実を紹介していた。トレーニングやウェア等も時代とともに変わっており、この博物館では歴史を知るということも大きなテーマだと思った。
- ムーブscopeではアスリートの動きを示す内容があったが、トップの記録との比較やランキングなどが出るのか。キッズスポーツチャレンジというのがあり、スタート時から何十年間も蹴る力等の身体能力データを蓄積し、数十万人の中の現在地が順位も含めて出る。能力を伸ばすためにどのようなトレーニングができるかという、どんな指南をしてくれるのか興味深い。体験者が現在地を知れて、今後の行動変容や身体を動かすということに繋がると思った。

## 議題（2）新博物館の開館を見据えた諸課題への取組について

事務局より資料3について説明があった。委員からの主な意見は以下のとおり。

- スポーツミュージアムネットワークについては10年前から言い続けてきたため非常に感慨深い。
- アメリカは様々な場面で資金集めをしていて参考となる点がある。日本でも自己収入を稼ぐ運営が求められている。
- （関係館の事例紹介）リニューアルオープンに向けた建物改修に伴い、中身を全て空にしたことから、展示内容も含めて改修した。入場料変更もこの機会に行う。展示のストーリーは大きく変更していないが、導入部分は強化し大きく変えた。入口からワクワク感を高めていくための設計を行った。様々な方々に優しい展示、インバウンド対応のため多くの情報や多言語を入れ込んでおり、QRコードやデジタルで対応するような仕様とした。デジタルを活用した見どころが増えている。一方でデジタル技術は非常に便利だが、技術進歩のスピードがかなり速い。秩父宮がここから5年後の開館、更に開館から5年後の10年後となると、陳腐化するのも早く将来のデジタル技術がどうなっているかの想定は難しい。デジタル機器の維持管理費も意識しながら計画しないといけない。実物資料をしっかりと展示していくことであまり枯れない、魅力を提供できるものである。そういったところのバランスが重要になってくると思う。展示スペースにおいてデジタルの導入が進む部分があるが、建物自体のサイズは変わらないため、いかに実物展示のスペースを守るかに苦慮している側面もある。当館もインバウンドの方々が増えることも見越しており、今後秩父宮もどのような形でお客を迎えるのか、無料や有料も決めていく必要がある。入場料収入以外の収入要請もあるため難しさもあるが、展示や運営、持続性も考えながら間もなく再開館を迎えるところだ。
- 今後は自己収入について高い目標が掲げられ、様々な取組みが出てくると思われる。開館まであと5年あるため、それらの事例を参考にしながら、マネジメントについても検討が必要である。

## 5. 事務連絡

- ( 1 ) 令和 7 年度アウトリーチ展覧会について
  - ( 2 ) 次年度有識者懇談会の方向性について
- 事務局より資料 4 について説明があった。

(以上)